

## 1900年代前半のパレスチナにおける ユース・アリヤー支援事業 —ヘンリエッタ・ゾールドの活動を中心に—

田 中 利 光

### はじめに

イスラエルにおける高等教育レベル（ソーシャルワーク学士プログラム）による本格的なソーシャルワーク教育の導入は、1958年にヘブライ大学にPaul Baerwald School of Social Workが、American Jewish Joint Distribution Committee、イスラエル福祉省及びテル・アビブ市からの支援を受けて創設されたのを嚆矢とするが、そこに至るまで、1920-30年代に、イスラエル建国前のパレスチナにおける医療、福祉、教育分野の基盤整備を行ったのはHenrietta Szold（1860-1945）（以下「ヘンリエッタ・ゾールド」あるいは「ヘンリエッタ」または「ゾールド」と記す）である。

ヘンリエッタ・ゾールドは、アメリカ国籍のユダヤ人であった。第一次世界大戦等によるユダヤ人難民問題を機に、1912年に女性シオニスト団体Hadassah（以下「ハダッサ」と記す）をニューヨークで創設し、1920年には自らもパレスチナに赴き、アメリカ・シオニスト医療団の責任者としてイスラエル建国（1948年）前のパレスチナにおける医療支援に尽力した。

彼女の活動は、非常に困難な民族問題、宗教問題、政治問題と対峙するなかで推し進められたものであった。とくに、ユダヤ人のパレスチナへの大規模流入によって周辺のアラブ諸国との共生や和平問題といった困難な課題に向き合うことになり、また、戦時体制下における難民ユダヤ人の発生で、とくにドイツからの難民青少年の受け入れ態勢の整備が急務となり、そのような緊急避難的な状況から当初の医療支援活動に加え、青少年教育や福祉の整備へとハダッサの支援体制が拡大していった。

ヘンリエッタ・ゾールドの業績として、イスラエル建国以前のパレスチナにおけるハダッサ病院の建設を含む医療支援についてはよく知られているが、一方、難民ユダヤ人（Aliyah「アリヤー」と呼ばれている）、なかでも、難民青少年ユダヤ人Youth Aliyah（以下「ユース・アリヤー」と記す）への福祉、教育支援に関しては、彼女の後半生をかけた重要な事業であるにも拘わらず、わが国ではあまり紹介されておらず研究も少ない。本稿では、ヘンリエッタ・ゾールドの1933年以降のユース・アリヤー支援

(とくに福祉及び教育支援)の背景と内容についてみていく。

彼女の政治的立場は、一貫して平和主義であった。ユダヤ人によるイスラエル国家樹立というシオニストの目標を放棄し、ユダヤ人とアラブ人との平和共存を希求する政治団体B'rith Shalom (「平和の契約」=「ユダヤ・パレスチナ平和同盟」)が1925年に設立されるが、そのメンバーにヘンリエッタ・ゾールドも加わっていた。彼女は1931年に、イスラエル建国前のパレスチナにおけるユダヤ人コミュニティの最高機関であるVa'ad Leumi (General Jewish Council of Palestine「パレスチナのユダヤ人一般評議会」)の執行役員になった。それまで医療支援に専念していた彼女が、福祉分野の整備に本格的に取り組むようになったのはそれからである。本稿の目的は、彼女の幅広い活動内容のなかで特にユース・アリヤーへの支援活動を中心に、イスラエル建国前のパレスチナに建設された彼らのための職業訓練、生活支援、福祉、教育に関する事業を取り上げ、その成果と、一方で、ニーズに対し団体の機能を果し得なかった課題について分析する。

これは、筆者がテーマとするディアスポラ・ユダヤ人を主な対象とする「ユダヤ慈善の近代化」に関する研究の一部であり、1900年代前半、シオニズム運動や第一次・第二次両大戦の戦禍によってパレスチナに移住したユダヤ人たちと彼らを支援したハダッサ等によって、ユダヤ慈善の近代化がどのように推し進められたのか、その形成過程を知るためのものである。

今日、イスラエル国内にある高等教育機関5か所のソーシャルワーク学部及び大学院(Hebrew University, Tel Aviv University, Bar-Ilan University, Haifa University, Ben-Gurion University)の研究者の間で、1900年代前半の自国の社会事業史に関しては、積極的に取り組まれていないのが現状である。ソーシャルワークの歴史研究への関心の低さが要因の一つに挙げられよう。しかしながら、近年、イスラエル建国後の自国のソーシャルワークを歴史的、分野別に総括した共同研究の取り組みも見られるようになり、その成果の一つがLoewenberg, F. M. (ed.) (1998) *Meeting the Challenges of a Changing Society: Fifty Years of Social Work in Israel.*, The Magnes Press, The Hebrew Universityである。

## 1. ヘンリエッタ・ゾールドの活動の場となる同時代のパレスチナ

1890年代初めに、オーストリアのユダヤ人Nathan Birnbaum (ナタン・ビルンバウム)によってつくられたZionism (シオニズム)の呼称は、ウィーンで記者として働いていたユダヤ人Theodor Herzl (テオドル・ヘルツル、1860-1904)の提唱によって1897年にバーゼルで開催され

た第1回シオニスト会議によって具現化の一步を踏み出すことになる。シオニズムとは、ディアスポラ・ユダヤ人たちが、過去に先祖が暮らしていた土地であるシオン（エルサレムの別称）に帰還し、そこにユダヤ国家の再興を目指す運動である。

第一次大戦中の1916年5月に、イギリス、フランス、ロシアの間で、それまでオスマン帝国領であった中東地域の分割とその帰属をめぐるサイクス・ピコ協定が結ばれた。そこで、パレスチナについては共同統治領となった。1917年11月には、イギリス外相によってパレスチナにおけるユダヤ人居住地の建設とその支援を約束したバルフォア宣言がなされた。折しもロシアではボグロム（ユダヤ人排斥運動）によってロシア在住のユダヤ人たちの国外脱出が始まっていたころであり、ヨーロッパでは1914年から始まった第一次大戦や、また1938年11月にドイツの各地で発生した反ユダヤ主義暴動・迫害（いわゆる「水晶の夜“Kristallnacht”」）を発端として、のちにホロコーストに発展していったユダヤ人追放は、彼らのパレスチナ帰還を促すことになった。

## 2. ヘンリエッタ・ゾールドの生い立ちと青年期

ヘンリエッタは1860年12月21日にユダヤ教ラビの長女としてメリーランド州ボルチモアで誕生した。父親のBenjamin Szold（1829-1902）（以下「ベニヤミン・ゾールド」と記す）はハンガリー出身でブレスラウ大学とブレスラウ・ラビ神学校で学び、1859年にSophia Schaarと結婚し、ボルチモアの改革派ユダヤ教会Oheb Shalom Congregationのラビに就任した。8人の娘をもうけたが、ヘンリエッタ、Rachel Jastrow、Bertha Levin、Adele Seltzerの4人が生き残った。ベニヤミン・ゾールドはシオニズムの擁護者であり、自由主義及び人道主義の見地から、自らボルチモアに立ち上げた慈善団体をもって1880年代に米国に流入したロシアからの難民を支援した。ヘンリエッタも父親とともに難民のための勉強会を組織した。

ヘンリエッタはOheb Shalom Congregationに附属する宗教学校でドイツ語と英語の基礎及びユダヤ教の教育を受け、家庭ではドイツ語を使用していた。さらに彼女は自宅で父親からフランス語とヘブライ語を教えられた。母親からは裁縫、料理、ガーデニングを教わった。ヘンリエッタはその後ボルチモアの公設学校Western Female High Schoolに学び1877年にそこを卒業した。

彼女は1877年から1893年まで、ボルチモアの富裕子女が通うMisses Adam's Schoolで、フランス語、ドイツ語、植物学、数学等の教師を

勤め、同時にOheb Shalom Congregationの宗教学校で成人対象の聖書と歴史コースの教師も勤めた。彼女は自身の知識の向上のため、Johns Hopkins UniversityとPeabody Instituteの公開講座を受講していた。彼女は高校を卒業した年から執筆活動をするようになり、ニューヨークの*The Jewish Messenger*誌のボルチモア特派員として働いた。

ボルチモアのヘブライ主義者たちは、1888年10月、ボルチモアにロシアからの移民たちのゲッターを中心に設けられたIsaac Bar Levison Hebrew Literary Societyで、移民のための夜間学校「Russian School（以下「ロシア学校」と記す）」を開設した。ロシア学校の運営資金はBaron de Hirsch基金委員会の寄付、Baron de Hirsch基金ボルチモア委員会の寄付、受講生の授業料、Hebrew Literary Societyの寄付、ボルチモア市民の寄付等によって賄われていた。ヘンリエッタ・ゾールドはそこで1893年まで教えた<sup>1)</sup>。ロシア学校は1898年にボルチモア市に引き継がれ、ユダヤ教徒のみならずキリスト教徒にも門戸が広げられ、移民の同化（アメリカ化）のモデルとされた。

ヘンリエッタはロシア学校で講義を受け持つ傍ら、1889年11月に自らも近所にあった店舗の二階の二部屋を間借りして、そこで英語やアメリカ史を教授するようになった。ヘンリエッタが自らをシオニストとして意識したのはその頃であった。1893年の秋に彼女はロシア学校の仕事を辞め、Jewish Publication Society (JPS) の編集委員会の秘書として1916年まで働いた。その間、1904年から1908年まで自らもJPSが発行している*American Jewish Year Book*を編集している。1902年に父親を亡くしてから、彼女は母親とともにニューヨークに移り住んでいる。

### 3. ハダッサ創設とその初期の活動

ヘンリエッタ・ゾールドが自らをシオニストとして意識したのは、前述したとおり1888年から1893年までの、ロシアからの移民ユダヤ人への支援活動を行っていた頃であったが、幼少期から父親の慈善活動に接しその影響を受けていたであろうことは容易に想像できる。彼女は、1897年にボルチモアのシオニスト協会として新たに組織されたHebras Zionの会員になっている。彼女は母親とともに1909年に初めてパレスチナに旅行している。1910年にはFederation of American Zionists（アメリカ・シオニスト連合）の秘書官に選出されている。このようにして、彼女のシオニストとしての足固めがなされていった。

ゾールドは、1912年2月24日に、ハダッサと称するシオニズムに関す

る女性による学習グループを組織した。設立メンバーは38人で、当初は Hadassah Chapter of Daughters of Zion と称していたが、1914年の第一回会議で名称を Hadassah に変更した。ハダッサは少なくとも1914年の名称変更時点で、活動の目的をパレスチナでの活動に置いていたことが、『ハダッサ規約 (Hadassah Preamble and Constitution)』から分かる<sup>2)</sup>。同規約にはハダッサの目的として、「本協会の目的は、パレスチナにおいてユダヤ人の機関を設立して事業を發起し、アメリカにおいてシオニストの理想を育むことである」(同規約「前文」の「目的」の項参照)と記されている。また、同規約「前文」の「目的」の附則として「その資金は、別段の決定がなされるまでの間規約の規定に従い、パレスチナの町と居留地における地区看護システムの確立に向けられる」とある (Hadassah 1915 : 10 参照)。なお、ゾールドは1914年の第一回会議でハダッサの会長に選出され1926年まで同会長職を務めた。

1916年の母親の死は彼女をシオニストとしての活動に専念させた。1916年にゾールドは、ハダッサに4000人の女性を組織し、医師、看護師、管理者等で構成される American Zionist Medical Unit を編成した。その活動資金はシオニスト組織、ハダッサ及び共同配分委員会から供給され、ユニットは1918年6月にパレスチナに向かった。まもなく米国内のシオニスト諸団体・グループは、Zionist Organization of America に統合され、ゾールドがシオニストの教育と宣伝活動を担当した。彼女自身も Isaac Rubinow 博士の辞任に伴い1920年2月に医療ユニットの代表としてパレスチナに赴き、その後25年間のほとんどをパレスチナで過ごした。パレスチナに渡った彼女は、新しく設立された看護師養成学校を運営し、ユダヤ人学校での保健指導を指揮した。

しかしながら1922年の終わりまではその運営は順調ではなかった。その後、ユニットは拡大され、それまでの American Zionist Medical Unit から Hadassah Medical Organization に改組され、ハダッサによって年間予算が供給された。1923年にゾールドは病気の妹を見舞うため米国に戻っている。一年後 (1924年)、彼女は保健と教育の新たな計画を持って World Zionist Organization の執行役員としてパレスチナに戻ってきた。1926年に彼女はハダッサの会長職を辞し名誉会長に就任した。1930年には70歳の誕生日をハダッサから祝ってもらうために再度米国に帰国し、その折、Jewish Institute of Religion から名誉文学博士号を授与されている。彼女は1931年に Va'ad Leumi の幹部に選出された。これは、それまでパレスチナに入植していた Yishuv<sup>3)</sup> と呼ばれるユダヤ人の自治による準政府機関

(Jewish Self-Governing Institutions) の、保健と教育の部門を引き継いだ組織である。ゾールドはこの時期より自らの活動を、それまでの医療支援から、入植ユダヤ人青少年（ユース・アリヤー）の福祉・教育支援へと大きく舵を切っている。

#### 4. ユース・アリヤー支援の背景

ゾールドは前述したように、1931年にVa'ad Leumiの幹部に選出されてから、彼女自身の活動をそれまでの医療支援から、ユース・アリヤーを中心とした福祉と教育に転換させている。Va'ad Leumiは1920年に設立されており、イスラエル建国以前のパレスチナにおける入植ユダヤ人（すなわちYishuv）の議会における最高機関であり、主要派閥の代表者（メンバーは20人から40人）であった。彼らは政治的にはあまり活発にはならず、アラブとの平和共存の構築を目指していた。そのため医療、福祉、教育分野の機能強化に努めた。

Yishuvは、1920年までパレスチナを支配していたオスマン政権によって権限が与えられてはいなかったが、今日において地方議会が担っているような機能を有し、選挙委員会によって運営され、土地・不動産の登記や各種の公共サービスを提供していた。しかしながら、公共サービスの発展は非常に遅く、第一次大戦によって中断した。発展を阻んだ要因にパレスチナ社会の中でのユダヤ人の政治的地位の低さがあつた。

パレスチナにおいて、入植ユダヤ人（アリヤー）の歴史は、1882-1904年の第一次アリヤー（主にロシア、ルーマニア、ガリシア出身）、1904-1919年の第二次アリヤー（主にロシア出身）、1919-1923年の第3次アリヤー（主にロシア、ポーランド、中部ヨーロッパ、東ヨーロッパ出身）、1924-1931年の第四次アリヤー（主にポーランド、ロシア出身）、1932-1939年の第五次アリヤー（主にドイツを含む中部ヨーロッパ出身）に区分される。その中で、とくに入植ユダヤ人青少年（ユース・アリヤー）への対策が重要課題になったのは第五次アリヤーである。ゾールドが、医療活動からユース・アリヤーへの福祉・教育活動へと大きく舵を切ったのはこの時期である。

1933年8月にプラハで開催された第18回シオニスト会議では、ヒトラー政権の脅威が確認され、パレスチナ事務所が開設された。ゾールドは1932年から1937年までVa'ad Leumiのソーシャルサービス部門の責任者であった。彼女はまた、1933年から亡くなる1945年までユース・アリヤーの監督者でもあつた。

ゾールドは1936年9月13日の日付で、Va'ad Leumiの幹部たちにヘブライ語による『子どもたちの叫び』と題する小冊子を提示している。その中でゾールドは、同時代のパレスチナにおけるユダヤ人の子どもたちへの教育を、最重要課題であると位置づけている（Szold 1937参照）。

表1 1919-1948年のパレスチナにおけるユダヤ人の自然増加と移民による増加

期間	人口の増加			期間終了時の人口	自然増加と移民による増加比(%)		
	自然増加	移民による増加	総増加		自然増加	移民による増加	総増加
1919	—	—	—	56,000	—	—	—
1919-23	6,312	29,988	36,300	(a)	17.4	82.6	100.0
1924-31	26,013	56,825	82,838	92,300	31.4	68.6	100.0
1932-38	42,413	193,671	236,084	175,138	18.0	82.0	100.0
1939-45	61,667	93,391	155,058	411,222	39.8	60.2	100.0
1946-48	30,734	53,923	84,657	566,280	36.3	63.7	100.0
				650,937			

(a)推定

出典：Frankenstein C. (1950) p. 302, Table 11 を改編

表2 1870-1947年のパレスチナにおける新規ユダヤ人セツルメント数

年	数	年	数	年	数	年	数	年	数
1870-1922	72	1927	7	1932	16	1937	19	1942	7
1923	6	1928	3	1933	28	1938	18	1943	14
1924	9	1929	4	1934	12	1939	19	1944	6
1925	7	1930	9	1935	15	1940	8	1945	13
1926	12	1931	3	1936	11	1941	7	1946	26
								1947	12

出典：Frankenstein C. (1950) p. 300, Table 9 を改編

1919年から1948年（イスラエル国家成立年）までのパレスチナにおけるユダヤ人人口の自然増加と移民による増加をみると、自然増加と移民による増加の比率は、平均すると、自然増加が28.58%に対し移民による増加は71.42%と、圧倒的に移民による増加が多い（表1参照）。さらに、1870年から1947年までのパレスチナにおいて、各年における新規ユダヤ人セツルメント（入植地）数は、第一次アリヤー以前から第二次アリヤーまでの間に72か所の入植地がつくられていたのを除けば、第18回シオニスト会議でヒトラー政権の脅威が確認された1933年に比較的多く（28か所）の入

植地がつくられている（表2参照）。

イスラエル建国の1948年から、1950年までの間に209の新規入植地が誕生し、1870年から1950年までを合計すると、572か所の入植地が存在した。

## 5. ユース・アリヤー支援の概要

ユース・アリヤーはシオニズム運動の一環であり、ユダヤ人の青少年を苦難や迫害、貧困から救い、パレスチナ（建国後はイスラエル）において彼らを保護し、教育を行い、彼らが自立するために支援することを目的としている。その活動はユダヤ機関の部門として運営され、自主的なボランティア精神によって支えられていた。

ユース・アリヤーへの支援は、ナチスが台頭してくる頃にドイツで活動を開始し、家族と離れなければならなくなった子どもや、ホロコーストによって孤児となった子どもをパレスチナ（1948年の建国後はイスラエル）に移住させ、保護、教育等を行うことに始まった。その活動は1933年から1970年にかけて続いた。その間に、約140,000人の青少年を世話し、そのうちの約125,000人が居住支援を受けた。公には前述したように（「4. ユース・アリヤー支援の背景」参照）、1933年に開催された第18回シオニスト会議でユース・アリヤー支援の責任者にゾールドが就任したことに始まるが、それ以外にも、私的な活動としてドイツの青少年をパレスチナに移送し保護していた人物がいた。Recha Freier（1892-1984）（以下「フレイヤー」と記す）である。

フレイヤーはベルリン在住のユダヤ人で、改革派ユダヤ教ラビMoshe Issachar Freierの妻であった。彼女は1932年に、ドイツ在住のユダヤ人青少年をパレスチナに移送することを考えた。彼女はHistadrut（「ユダヤ労働総同盟」）<sup>4)</sup>に連絡を取り、キブツが彼らを引き受けるように提案した。1932年10月に最初の12人のグループが、Ben Shemenの青少年村に送られた。1933年1月にヒトラーが首相に就任しヒトラー内閣が発足すると、にわかには移送が加速され、そのための支援団体としてフレイヤーはベルリンにHilfskomitee für Jüdische Jugend（「ユダヤ人青年支援委員会」）を設立した。同時に彼女はゾールドに連絡を取り、パレスチナに到着したあとの青少年の面倒を見てくれるように頼んだ。ゾールドは、後述するように（7. 「ユース・アリヤーの実現しなかった計画」参照）、フレイヤーの計画に対して難色を示し、それに関しては実現しなかった。

ゾールドが指揮を執るユース・アリヤーの支援では、最初のまとまった

一団（60人）が1934年2月にキブツEn-Harodに到着した。その後、1935年の半ばまでに、キブツ11か所、農業学校4か所、職業訓練センター2か所に約600人が収容された。1935年に、青少年運動の指導者Hans Beythがゾールドのチーフ・アシスタントに就任し、同年末にはハダッサがユース・アリアーの資金援助の責任を担うことになった。

ナチスによってオーストリアとチェコスロバキアが征服されると、ユース・アリアーの守備範囲も拡張され、これらの国々を含むようになった。さらに、1938年11月にドイツの各地で発生した反ユダヤ主義暴動・迫害、いわゆる「水晶の夜（Kristallnacht）」事件のあと、ヨーロッパのユダヤ人青少年の救出は緊急を要するようになった。第二次大戦によって、5,000人以上の青少年がパレスチナに送られてきたが、そのうちの3分の2がドイツから、5分の1がオーストリアから、残りは他の国々からであった。移民証明書不足のため、そのほかの約15,000人は西ヨーロッパ諸国、とくに英国に送られた。

## 6. ユース・アリアー支援の関係諸機関及び団体

1950年当時のイスラエルにおける児童福祉及び青少年の支援に関わった公的機関及び団体について、まず、その全体像をみることにする（Frankenstein 1950参照）。

政府では、①内務省、②保健省、③文部省、④社会福祉省、⑤労働保険省、⑥中央統計局、⑦法務省、⑧安全保障省、⑨宗教省、⑩戦争犠牲者保護省、が児童福祉及び青少年の支援に関連している。

ユダヤ機関では、①移民同化局、②児童・青少年移民局（ユース・アリアー）、③青少年・開拓局、がある。

地方自治体の社会サービスでは、①テル・アビブ＝ヤッフォ市の教育部局、②テル・アビブ＝ヤッフォ市の社会福祉部局、③エルサレム市の教育部局、④エルサレム市の社会福祉部局、⑤ハイファ市の教育部局、⑥ハイファ市の社会福祉部局、⑦共同集落、⑧他の地方当局、がある。

労働組織では、ユダヤ労働総同盟（Histadrut）と、その傘下の、①疾病ファンド（Kupat Holim）、②保険・救済計画、③Hapoel（スポーツ団体）、④Noar Oved（労働者青少年組織）、⑤Amal（職業訓練システム）、⑥他の労働組織、がある。

青少年運動では、①非政治的な団体（スカウト運動、Working Youth、Young Maccabiなど）、②政治的なイデオロギーを持つ団体（社会主義統一運動、Mahanot Olimなど）、③政党関連団体（左翼的なHashomer

Hatsair、宗教的なBnei Akiba、修正主義的なBeitar) など、12の団体がある。

移民団体は、相互扶助、救済または仲介、カウンセリング等を通じて、移民の同化を手助けしている。団体として、①Councils of Oriental Communities、②Kollelim、がある。Kollelimは主にエルサレムにおいて、大規模なコミュニティ・ハウスにおいてみられる。彼らはそれぞれ独自の宗教施設や福祉施設、またいくつか独自の学校を持っている。

女性団体では、①Hadassah (ハダッサ アメリカ女性シオニスト機構)、②Women's International Zionist Organizations(WIZO) (国際女性シオニスト機構)、③Women Workers' Council of the General Federation of Jewish Labor and Working Mothers' Association (女性労働者評議会ユダヤ人労働・ワーキングマザー協会)、④Mizrahi Women's Organization in America (Mizrahiアメリカ女性機構)、⑤OMEN Mizrahi Women's Organization in Israel (OMEN Mizrahiイスラエル女性機構)、⑥Women Workers' Organization of Hapoel Hamizrahi (女性労働者のHapoel Hamizrahi機構)、⑦Women Workers' Council of the Agudath Israel Workers Organization (Agudath Israel労働者機構の女性労働者評議会)、⑧Women's Organization of the General Zionists (一般シオニスト女性機構)、⑨Herut Women's Organization (Herut女性機構)、の9団体がある。

上記の女性団体のなかで、ハダッサの1950年当時の児童・青少年に向けた事業概要は次のとおりである。①子ども部門のある病院や診療所、②家庭医療サービスのある社会サービス部門、回復期の家など、③出産及び幼児福祉センター、④学校衛生部、⑤教育用キッチン付き学校昼食計画、⑥グッゲンハイム遊技場、⑦幼児指導のためのLaskerセンター (エルサレム)、⑧Brandeisセンターの職業指導及び訓練 (エルサレム)、⑨ユース・アリーヤ業務への関与、⑩一般的な疾病の基金設立、である。

その他、ボランティア代行団体には、①Joint Distribution Committee (共同配分委員会)、②ORT-Organization for Vocational Training (ORT-職業訓練機構)、③OSE-Health Organization (OSE-保健機構)、④American Fund for Palestinian Institutions (パレスチナ組織のためのアメリカ基金)、⑤Alliance (アライアンス)、⑥Anti-Tuberculosis League (抗結核連盟)、⑦Society for the Treatment of Crippled Children (障害児治療協会)、⑧Migdal-Or Society (Migdar-Or 協会)、⑨Central Parents' Committee (中央ペアレント委員会)、⑩Society for Agricultural Training (農業研修会)、⑪Henrietta Szold Foundation for Child and

Youth Welfare (ヘンリエッタ・ゾールド児童・青少年福祉財団)、⑫その他のボランティア推進団体としては、幼稚園、小学校（主に宗教系学校）、中学校、職業訓練学校、教師養成学校、一般児童（健常児）及び身体や知的にハンディキャップを持つ児童のための「子どもの家」、医療救護施設、がある。

職業訓練を例に言えば、1950年当時、ユース・アリヤー等への職業訓練学校をハダッサを含め複数の団体が運営し、その数はイスラエル国内に36校あった。そのなかの一例を挙げれば、エルサレムに9校（ハダッサ運営が2校、Organization for Vocational Training運営が2校、General Federation of Jewish Labour運営が1校、Alliance Israelite Universelle運営が1校、Mizrahi Women of the United States of America運営が1校、Women Workers' Council運営が1校、Education Department運営が1校）あった。同様にテル・アビブには7校（Organization for Vocational Training運営が2校、Tel-Aviv Municipality運営が1校、General Federation of Jewish Labour運営が1校、Mizrahi運営が1校、Mizrahi Women of the United States of America運営が1校、Women Workers' Council運営が1校）あった。

次いで、Va'ad Leumiが1947年に作成し、国連特別委員会に提出した『パレスチナのユダヤ人コミュニティとソーシャルサービス』によれば、1947年当時のサービスの実施状況は次のとおりである（Va'ad Leumi 1947：40-41参照）。

- a) 約200の地域における47のソーシャルサービス局の運営と、120人のソーシャルワーカーの雇用。
- b) 約300,000イギリスポンドの年間予算を有する317の学校及び他の教育機関における29,000人以上の子どもを対象とする学校給食制度。
- c) 学校及び幼稚園の約40,000人の子どもを対象とする牛乳流通制度。
- d) 74の夏休みキャンプにおける約9,000人の子どもの収容。
- e) 約2,000人の子どもが出席している小学生向けの50のクラブ。
- f) 1,500人の出席者を有する勤労青年向けの25のクラブ。
- g) 平均利用者数が4,000人を超える50の遊び場。
- h) 孤児施設、児童村、ネグレクトを受けた子どもの家など、102の児童施設（合計5,136人の児童。これにユース・アリヤー施設は含まれていない<sup>5)</sup>）。
- i) 850人収容可能な高齢者ホーム。
- j) 病弱及び回復期にある貧困者のための施設。

## 7. ユース・アリアーの実現しなかった計画

前述した（「5. ユース・アリアー支援の概要」）フレイヤーは、ゾールドとのユース・アリアーをめぐるパレスチナへの受入れ交渉の中で、実現しなかった計画について述べている（Freier 1961参照）。それによると、1930年代に、フレイヤーはベルリンでユース・アリアーの支援活動を行っていたが、1935年の春に、エルサレムにゾールドを訪ねている。フレイヤーはその時の会話の内容にも触れ、ゾールドはフレイヤーに、ドイツからのユース・アリアーがどのような結果をもたらしているのか、まだその分析は明らかになっていないが、さらに計画を立てたいのかと尋ねてきた。ゾールドが分析結果を得るまで次の計画に進まないことを促したのは、彼女の責任感からであった、と回顧している。

ゾールドがフレイヤーに好意的な反応を示さなかった背景には、当時のパレスチナの状況にあった。そのころゾールドはパレスチナの福祉問題に取り組んでいたが、とりわけ資金不足に悩まされていた。移民青少年を受け入れるにあたっては、学校等が不足しておりニーズに応えることが出来ないかと判断していた。そのような実情（資金、組織、施設等の不足）は、ゾールドから直接にフレイヤーに伝えられた（Zeitlin 1952：144参照）。

ゾールドとの会談に実りが期待できないことを悟ったフレイヤーは、その足で、パレスチナでポーランドのユダヤ人事情に精通している人物やグループと接触している。彼女はそれらの人物やグループ名を明らかにしていないが、彼らはフレイヤーにポーランドのユース・アリアー計画を進めるよう進言した。フレイヤーは、彼らがポーランドのユース・アリアー計画に賛同する意志のあることを確信しベルリンに戻った。

帰国したのち、フレイヤーはエルサレムのユース・アリアー事務所がポーランドのユース・アリアーを計画していることを知ったが、しかしながらその計画は実行に移されなかった。エルサレムのユース・アリアー事務所は、その理由を「必要な入国許可証を取得することが不可能になった」と伝えてきた。フレイヤーは、ポーランドのユダヤ人青少年を証明書なしで渡航させることまで求めたが、エルサレム事務所は、違法な移民者は自国に送還されると伝えてきた（Freier 1961：49-50）。

彼女が提案したユース・アリアー基金の設立計画も実践に移されることはなかった。その後、1939年5月にエルサレムのユース・アリアー事務所長から基金設立に同意する旨の知らせがあり、フレイヤーは取り組もうとしたが、すでに戦争は目前に迫っており、動くことはできなかった。

## おわりに

今回の研究では、ヘンリエッタ・ゾールドのハダッサを通じたパレスチナへの福祉、教育支援の特徴を、(1)委任統治領のパレスチナにおける周辺諸国との軋轢を常に抱えながらの事業であったことと、(2)戦時体制への突入の危機に直面したときに、ゾールドが支援事業をそれまでの医療から、ユース・アリエーを中心とした福祉・教育活動へと変更した二点に着目し、それらの軋轢や活動方針の変更の背景とそれらにどう向き合い行動してきたのかについてみてきた。

(1)については、1900年代前半のパレスチナで、ユダヤ人の立場は、Yishuvと称される自治組織があったが、パレスチナが委任統治領であったことから、彼らの政治的及び経済的な基盤は脆弱であった。Yishuvが担ってきた保健、医療、福祉、教育に関係する既存の諸機関、団体の活動に加え、1918年からハダッサが医療を中心とした支援に参画した。その指揮を執っていたゾールドはシオニストであったが急進主義ではなかった。彼女自身の政治的立場は平和主義であることを自ら表明し、パレスチナ及びアラブとの間の諸問題の平和的解決と共存を望んでいた。しかしながら、当時、ゾールドの望む平和主義は、その時代にあってはユダヤ人にもパレスチナ人にも共感を得るのは難しく、そのような状況下での活動であった。

Rose L. Halprin は1932-1934と1947-1952年にハダッサの会長を務めた人物であるが、彼女はゾールドをよく知る人物として、ゾールドが自ら「私は政治的分野の議論に参加する資格はない」と語ったことを明かしている。ゾールドに接し協力していた人物の多くも、少なくとも部分的にゾールドの自己分析に同意するとしている。Halprinは、ゾールドの人生最後の数年間、とくに1942年5月のBiltmore Program (ビルトモア計画)<sup>6)</sup>が出されてからは、ゾールドは自身の明確な政治的立場を見つけることは困難であったとしている (Halprin n.d.: 9参照)。

(2)については、ユダヤ人の立場をめぐる状況が大きく変化する1930年代前半のドイツを憂慮し、ゾールドは活動をそれまでの医療から、児童・青少年の福祉、教育支援へと大きく転換させた。ゾールド自身も1933年に、ドイツからパレスチナへのユダヤ人青少年の移送に関して、ベルリン、ハンブルク、アムステルダムを視察している。同年、ゾールドは新設されたJewish Agency Central Bureau for the Settlement of German Jews in Palestine (ユダヤ機関「パレスチナにおけるドイツ系ユダヤ人定住中央局」)の諮問委員会のメンバーに任命され、ドイツ系ユダヤ人のパレスチ

ナ移住に関連する社会サービス事業を担当した。そのような背景の中で、1935年にフレイヤーがエルサレムを訪れ、ゾールドにユース・アリヤーへの支援を求めた際、ゾールドはフレイヤーの持ってきた計画を受け入れることはしなかった。その理由の一つに、ゾールドが実証を重視していたため、分析等を伴っていない計画の具現化には慎重であったということが、ゾールドと直接対話したフレイヤーの記録からうかがい知ることができる。彼女はその時のゾールドの対応について、「ゾールドが分析結果を得るまで次の計画に進まないことを促したのは、彼女の責任感からであった」と記している（Freier 1961：49及び本稿「7. ユース・アリヤーの実現しなかった計画」参照）。しかしながら、受け入れることを拒んだ背景には、当時のパレスチナには、ユース・アリヤーの受け入れに必要な社会資源が不足していた実情もあった。結果的に、その時のゾールドの慎重な判断は、第二次大戦中のユース・アリヤー事業の一部において停滞を招くことになった。

今回は、ゾールドの公的活動のうち、後半部のユース・アリヤーを中心とした福祉、教育分野についてみてきた。諸団体の事業の具体的な内容と分析については今後の課題としたい。

## 謝辞

本研究はJSPS科研費15K03949の助成を受けたものである。

---

## 註

1) ヘンリエッタ・ゾールドが退職した当時のロシア学校の運営状況は、1892年（下半期）-1893年（上半期）の登録者数665名、平均出席者155名、授業数89、クラス数7、1893年（下半期）-1894年（上半期）の登録者数900名、平均出席者233名、授業数101、クラス数8であった（Levin 1962：14参照）。

2) ハダッサ規約（*Hadassah Preamble and Constitution*）前文の内容は次のとおりである（原文は英語、翻訳は筆者による）。

連盟への加盟を願う多くのシオニスト協会が個別に標準規約を採択しており、以下の各項目について統一する。

目的：標準規約、第2条：「本協会の目的は、パレスチナにおいてユダヤ人の機関を設立して事業を發起し、アメリカにおいてシオニストの理想を育むことである」。標準規約、附則第1：「本協会の第一の目的に従って、その資金は、別段の決定がなされるまでの間、規約の規定に従い、パレスチナの町と居留地における地区看護システムの確立に向けられる。正会員の会費の50パーセントがその目的に充てられ、また、準会員の会費の95パーセントと、宣伝用途と明確に指定されていない限りにおいてすべての寄付金の90パーセントも、それに充てられる」。

会費：標準規約、第5条：「本協会の正会員（シオニスト）の会費は年3ドル、準会員（非シオニスト）の会費は年2ドルとする」。

国際シオニスト機構及びアメリカ・シオニスト連盟への加盟：標準規約、第6条：「正会員の会費に由来する収入の50パーセントは、経常費、宣伝費用として、また、正会員の人頭税の支払い、すなわち国際シオニスト機構のシェケルとアメリカ・シオニスト連盟の会費として、使用する」。

よって、決議する。以下の条項をアメリカ女性シオニスト協会連盟の規約及び附則として採択する。

- 3) イスラエル建国以前のパレスチナにおいて、入植していた初期のYishuv（ユダヤ人による自治組織）には、Petah Tiqva, Rosh Pina, Zikhron Ya'aqov, Rishon Le Zionなどがあった。これらの自治組織は、当時パレスチナを支配していたオスマン政権によって権限が与えられてはいなかったが、今日において地方議会が行っているような機能を有し、選挙委員会によって運営され、土地・不動産の登録や各種公共サービス等が行われていた（Va'ad Leumi 1947：5参照）。
- 4) Histadrutはパレスチナ委任統治時代の1920年にハイファで結成された。彼らは労働シオニストに分類され、ユダヤ人労働者の利益を守ることを主な目的とする。1921年に、のちにイスラエルの初代首相となるDavid Ben-GurionがHistadrutの総書記として選出されている。
- 5) ユース・アリヤーのための施設入所者数については、1934年2月-1939年10月はセツツルメント施設入所3,207人、児童村入所1,805人、1939年10月-1945年10月はセツツルメント施設入所6,660人、児童村入所4,495人、1945年10月-1948年10月はセツツルメント施設入所8,619人、児童村入所6,401人である（Kol 1957：113参照）。
- 6) 1942年5月6日から11日まで、ニューヨークのビルトモア・ホテルで開催された特別シオニスト会議において出された計画で、①パレスチナへのユダヤ人無制限入植、②ユダヤ軍創設、③ユダヤ国家としてのパレスチナ建設、等を希求するものであった。

## 参考文献

- Ben-Avram, Baruch (1978) *Political Parties and Organizations During the British Mandate for Palestine, 1918-1948.*, The Historical Society of Israel, The Zalman Shazar Centre for the Furtherance of the Study of Jewish History. (in Hebrew)
- Frankenstein C. (1950) *Child Care in Israel: A Guide to the Social Services for Children and Youth.*, The Henrietta Szold Foundation for Child and Youth Welfare.
- Freier, Recha (1961) *Let the Children Come: The Early History of Youth Aliyah.*, Weidenfeld and Nicolson.
- Geller, Lawrence D. (1982) *The Henrietta Szold: Papers in the Hadassah Archives 1875-1965.*, Hadassah.
- Geller, Lawrence D. (1983) *The Archives of Youth Aliyah 1933-1960: Part 1, The Years of the Holocaust and Ingathering.*, Hadassah.
- Chizik, Issac (1934) *The Political Parties in Palestine.*, Reprinted from the "Journal of the Royal Central Asian Society," Vol. XXI., January, 1934., The Royal Central Asian Society.
- Hadassah (ed.) (1915) *Hadassah: In America and in Palestine 1912-1915.*, Hadassah.
- Hadassah (ed.) (2002) *The Hadassah Story: A 90-Year Chronology.*, Hadassah.
- Halprin, Rose L. (n.d.) *Henrietta Szold: Zionist, Educator.*, Hadassah.

- Head Offices of the Keren Kayemeth Leisrael and Keren Hayesod (ed.) (1938) *Handbook of the Jewish Communal Villages in Palestine.*, Jerusalem Press.
- Horowitz, G. G. (1986) *The Hadassah Idea: History and Development.*, Hadassah.
- Jewish Agency for Palestine Child and Youth Immigration Bureau (1946) *Report of Child and Youth Aliyah to the 22nd Zionist Congress at Basle.*, Jerusalem Press.
- Kahanoff, Jacqueline (1960) *Ramat-Hadassah-Szold: Youth Aliyah Screening and Classification Center.*, Published with the Financial Assistance of UNESCO.
- Katzburg-Yungman, Mira K. (2012) *Hadassah: American Women Zionists and the Rebirth of Israel.*, The Littman Library of Jewish Civilization.
- Kessler, Barry (ed.) (1995) *Daughter of Zion: Henrietta Szold and American Jewish Womanhood.*, Jewish Historical Society of Maryland.
- Kol, Moshe (1957) *Youth Aliyah: Past, Present and Future.*, Published with the Financial Assistance of UNESCO.
- Levin, Alexandria L. (1962) Henrietta Szold and the Russian Immigrant School., *Maryland Historical Magazine*, Vol. 57, No. 1, pp. 1-15., Maryland Historical Society.
- Miller, Donald H. (1968) *A History of Hadassah 1912-1935.* (Doctoral Thesis, New York University)
- Nahon, S. U. (ed.) (1970) *Henrietta Szold 1860-1945: Twenty-five years after her death.*, Executive of the World Zionist Organization.
- National Council of the Jewish Community of Palestine (1946) *The Jewish Social Services in Palestine.*, Jerusalem Press.
- Parnass, Tikvah H. (1960) *Training Youth from New Immigrant Settlements: A Study in Youth Aliyah Education.*, The Child and Youth Immigration Department of the Jewish Agency for Israel., The Henrietta Szold Institute for Child and Youth Welfare.
- Pincus, Chasya (1962) *Ne'urim: The Rural Vocational Training Center of Youth Aliyah and Hadassah.*, Published with the Financial Assistance of UNESCO.
- Reinharz, S., Raider, M. A. (eds.) (2005) *American Jewish Women and the Zionist Enterprise.*, Brandeis University Press.
- Samuel, Edwin (1945) *Handbook of the Jewish Communal Villages in Palestine.*, Jerusalem Press.
- Simmons, Erica B. (2006) *Hadassah and the Zionist Project.*, Rowman & Littlefield.
- Smilansky, M., Weintraub, S., Hanegbi, Y. (eds.) (1960) *Child and Youth Welfare in Israel.*, The Henrietta Szold Institute for Child and Youth Welfare.
- Szold, Henrietta (1915) Recent Jewish Progress in Palestine., *American Jewish Year Book 5676 (1915-1916).*, pp. 25-158. Jewish Publication Society of America.
- Szold, Henrietta (1937) *The Cry of the Children in Palestine.*, Azriel press.
- Va'ad Leumi (ed.) (1947) *The Jewish Community of Palestine and its Social Services: Memorandum Submitted to the United Nations Special Committee on Palestine.*, Va'ad Leumi.
- Zeitlin, Rose (1952) *Henrietta Szold: Record of a life.*, Dial Press.